

## 地方都市における高齢者の生活と意識について

### — 小山市を事例として —

## Study on the Life and Thoughts of the Aged Living in a Local City

### — In case of OYAMA City —

瀧澤 雄三

Yuzo TAKIZAWA

#### 1. 研究の背景と目的

我が国の高齢者支援体制は、平成12年4月より曲がりなりにも公的介護保険制度がスタートし、以前の特別養護老人ホーム等をはじめとする施設中心のケアから在宅を中心としたケアへと、新たな段階にさしかかっている。またこのことは、生活してきた地域や生活環境の中でその生涯を全うしたいと考える多くの高齢者の意向に添ったものといえる。しかし、我が国の高齢化は世界でも類をみない速さで進行しており、本世紀初頭には4人に1人が65歳以上の高齢者という超高齢社会の到来が予測されている。このような中、高齢者を取り巻く環境には多くの問題が内包され、来る超高齢社会に向けた環境整備が急務の課題となっている。

そこで本研究では、地方都市居住高齢者の生活と意識の実態を把握分析し、今後の超高齢社会に向けた高齢者関連施設整備や、生きがい、住居、ケア対策等を含む高齢者支援対策を検討していく上での基礎資料を得ることを目的としている。

#### 2. 研究方法

##### (1) 調査対象都市及び地区とその概要

本研究の調査対象都市としては、人口の集中した中心市街地をもつこと、その中心市街地は生活関連施設の整備が進んでいること、都市部と農村部の地区間比較も本研究目的の一つであり、市内に農村的地域が存在すること等を条件に、栃木県小山市を調査対象都市として選出した。小山市は、栃木県南部に位置し、人口15.2万人（平成12

年3月現在）の県南地域の中核都市である。交通条件に恵まれ、鉄道はJR東北新幹線、東北本線、水戸線及び両毛線が、道路では国道4号及び50号が通る。また、首都東京への通勤圏にもあり、人口増加率は5.5%（平成2～7年）と県内上位の値を示している。そのため、人口の高齢化の状況をみると小山市の高齢者比率は14.0%で、全国平均や県平均に比し高齢化の進行は遅い。

調査対象地区は次の3地区とした。①人口が集中し、中心市街地として高齢者が多く、かつ一人暮らしや夫婦のみ世帯が多く居住する既成市街地である、JR小山駅西地区（以下、「旧市街」とする）、②新しく市街化が進行したJR小山駅東地

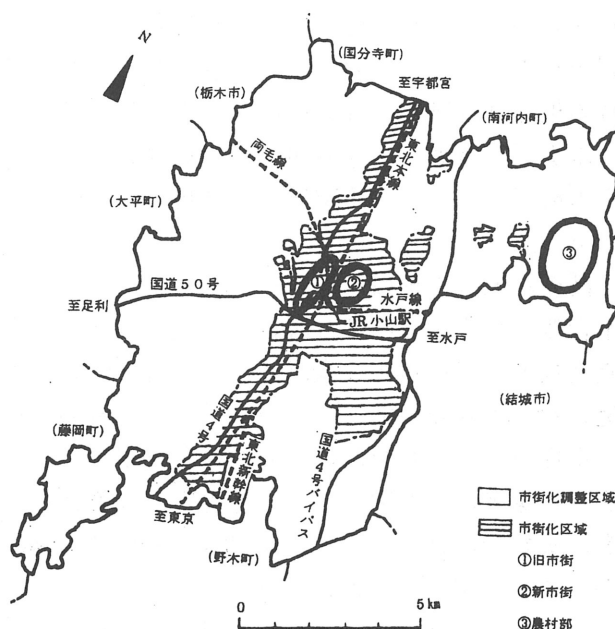


図1 小山市における調査対象地区の位置

区（以下、「新市街」とする）、③農業地区として、市東部の市街化調整区域（農業振興地域でもある）の地区（以下、「農村部」とする）の3地区である。調査対象3地区をみると、「旧市街」や「農村部」はほぼ4人に1人が高齢者であり、高齢化が著しい。特に、「旧市街」は要援護高齢者に関わる一人暮らしや夫婦のみ世帯が多く居住し、「農村部」は家族と同居高齢者が多いという特徴がある。逆に「新市街」は、高齢化はそれほど進行していない。

なお、調査対象3地区の位置については図1を、人口及び高齢化指標等については表1を参照。

表1 調査対象地区の人口及び高齢化指導

|               | 旧市街     | 新市街     | 農村部     |
|---------------|---------|---------|---------|
| 人口(人)         | 2 4 5 9 | 5 7 9 9 | 2 9 4 0 |
| 高齢者数(人)       | 5 6 0   | 5 4 6   | 6 5 8   |
| 高齢者比率(%)      | 2 4.1   | 9.6     | 2 3.6   |
| 総世帯数          | 9 2 7   | 2 6 1 6 | 7 9 5   |
| 高齢者のいる世帯数     | 4 0 1   | 3 6 6   | 4 7 7   |
| 高齢者のいる世帯比率(%) | 4 3.3   | 1 4.0   | 6 0.0   |
| 高齢者のみ世帯比率(%)  | 1 9.4   | 7.7     | 1 0.7   |

表2 地区別回答者数

単位：人

| 旧市街           |    |        |    |        |    | 新市街           |    |        |    |        |    | 農村部           |    |        |    |        |    |
|---------------|----|--------|----|--------|----|---------------|----|--------|----|--------|----|---------------|----|--------|----|--------|----|
| 1 3 1 (2 5 2) |    |        |    |        |    | 1 4 7 (2 9 8) |    |        |    |        |    | 1 0 3 (1 5 9) |    |        |    |        |    |
| 一人暮らし世帯       |    | 夫婦のみ世帯 |    | 家族同居世帯 |    | 一人暮らし世帯       |    | 夫婦のみ世帯 |    | 家族同居世帯 |    | 一人暮らし世帯       |    | 夫婦のみ世帯 |    | 家族同居世帯 |    |
| 3 6           |    | 4 5    |    | 5 0    |    | 2 9           |    | 6 4    |    | 5 4    |    | 2 0           |    | 3 0    |    | 5 3    |    |
| 男             | 女  | 男      | 女  | 男      | 女  | 男             | 女  | 男      | 女  | 男      | 女  | 男             | 女  | 男      | 女  | 男      | 女  |
| 9             | 27 | 18     | 27 | 15     | 35 | 7             | 22 | 35     | 29 | 19     | 35 | 5             | 15 | 16     | 14 | 15     | 38 |

( ) 内は調査対象者数

## (2)調査の概要と回答者の属性

高齢者の場合、郵送や留め置き等による本人記入方式のアンケート調査では、調査意図への理解度や回答にあたっての正確さ等で問題が多い。そこで、本研究では、調査対象者本人への訪問面接によるヒアリング調査とした。調査は、平成12年8月から11月に行った。主な調査内容は、①調査日の前日1日における全生活行為<sup>注1)</sup>、②高齢者の被介護経験と、介護に際しての希望介護者及び現実的介護者、③悩み事等での相談相手、④将来の居所についての希望居所及び現実的居所、等である。

調査対象者の選出にあたっては、小山市住民基本台帳（平成12年7月現在）を電算処理し、調査対象地区居住の65歳以上の高齢者について、地区別、世帯類型別に、住所、氏名、年齢の一覧表を作成し、これを基に調査対象者を選出した。調査対象者は3地区とも、一人暮らし世帯は全員を、夫婦のみ世帯は全世帯を対象に夫婦のどちらか一方を、家族同居世帯はランダムサンプリングし、3地区合計で708人を抽出した。その内、回答者は381人（回答率53.8%）であった。

なお、地区別回答者数については表2を、年齢別回答者数については表3を参照。

また、回答者の日常生活動作（表4）をみると、ADL評価の基本となる「歩行」「トイレ」「食事」「入浴」「着替え」については、いずれも“問題なし”が95%以上を占めている。このように回答者のほとんどが日常生活に関し問題のない状態であった。

表3 年齢別回答者数

単位：人

| 年 齢            | 旧市街           | 新市街           | 農村部           | 合 計             |
|----------------|---------------|---------------|---------------|-----------------|
| 6 5 ～<br>6 9 歳 | 3 6<br>(27.5) | 5 8<br>(39.5) | 2 5<br>(24.3) | 1 1 9<br>(31.2) |
| 7 0 ～<br>7 4 歳 | 4 1<br>(31.3) | 4 1<br>(27.9) | 2 9<br>(28.2) | 1 1 1<br>(29.1) |
| 7 5 ～<br>7 9 歳 | 2 3<br>(17.6) | 2 7<br>(18.4) | 2 7<br>(26.2) | 7 7<br>(20.2)   |
| 8 0 ～<br>8 4 歳 | 1 7<br>(13.0) | 1 4<br>( 9.5) | 1 6<br>(15.5) | 4 7<br>(12.3)   |
| 8 5 ～<br>8 9 歳 | 1 1<br>( 8.4) | 5<br>( 3.4)   | 6<br>( 5.8)   | 2 2<br>( 5.8)   |
| 9 0 歳<br>以上    | 3<br>( 2.3)   | 2<br>( 1.4)   | 0<br>( 0.0)   | 5<br>( 1.3)     |

( ) 内は%

表4 回答者の日常生活動作

| 単位：人 |              |           |         |
|------|--------------|-----------|---------|
|      | 問題なし         | 一部介助      | 全般介助    |
| 歩行   | 3 6 3 (95.4) | 1 5 (3.9) | 3 (0.8) |
| トイレ  | 3 7 7 (99.0) | 2 (0.5)   | 2 (0.5) |
| 食事   | 3 7 9 (99.5) | 0 (0.0)   | 2 (0.5) |
| 入浴   | 3 7 5 (98.4) | 4 (1.0)   | 2 (0.5) |
| 着替え  | 3 7 7 (99.0) | 2 (0.5)   | 2 (0.5) |
| 視力   | 3 4 8 (91.3) | 3 0 (7.9) | 3 (0.8) |
| 聴力   | 3 5 6 (93.4) | 2 2 (5.8) | 3 (0.8) |

( ) 内は%

## (3) 分析方法

高齢者の1日における分析対象生活行為<sup>注2)</sup>を、「家事」「身繕い・身辺整理」「仕事・ボランティア<sup>注3)</sup>」「医療」「その他」、及び余暇関連の「個人的活動での趣味・教養・娯楽（余暇1）」「講座・クラブ・サークルでの趣味・教養・娯楽（余暇2）」「スポーツ（余暇3）」「休息（余暇4）」「交流（余暇5）」の10項目に類型化するとともに、その具体的活動行為を把握し、地区別を中心に高齢者の日常生活とその特徴を分析する。また、介護や居所に対する高齢者の意識を、希望と現実といった側面から捉え、高齢者世帯類型や居住形態等を中心に分析し、今後の公的介護保険のあり方や高齢者関連施設の整備に向けた基礎資料とする。

## 3. 高齢者の日常生活行為について

## (1) 行為類型別活動状況（図2）

最初に行為類型（10項目）別の活動状況につ

いて概観する。

最も多いものは「個人的活動での趣味・教養・娯楽（余暇1）」活動である。ただし、この趣味・教養・娯楽については“個人的”活動がほとんどであり、他の人や仲間と一緒にやる「講座・クラブ・サークル活動での趣味・教養・娯楽（余暇2）」はほとんどみられないといった特徴がある。以下、「家事」、「仕事・ボランティア」、「休息（余暇4）」、「スポーツ（余暇3）」、「身繕い・身辺整理」、「医療」、「交流（余暇5）」が続く。なお、外での活動が多くみられるものには「仕事・ボランティア」や「スポーツ（余暇3）」等があるが、全般的にみれば高齢者の活動は自宅を中心としたものである。

次に、行為類型別に具体的な活動内容をみる。ここでは行為類型10項目の内、「家事」を除き、活動の多い「個人的活動での趣味・教養・娯楽（余暇1）」「仕事・ボランティア」「休息（余暇4）」「スポーツ（余暇3）」の4項目について行為別活動状況をみていく。

## (2) 「個人的活動での趣味・教養・娯楽（余暇1）」の行為別活動状況（図3）

図3をみると、“テレビ”を7割の高齢者が挙げ、突出して多い。次いで1～2割に急落するが、“庭・植木の手入れ”“新聞”が続く。他は全て1割以下であり、“読書”“裁縫”“ラジオ”“書道”以外は全て1%以下の活動状況である。

このように「個人的活動での趣味・教養・娯楽（余暇1）」における活動行為は多いが、実態と

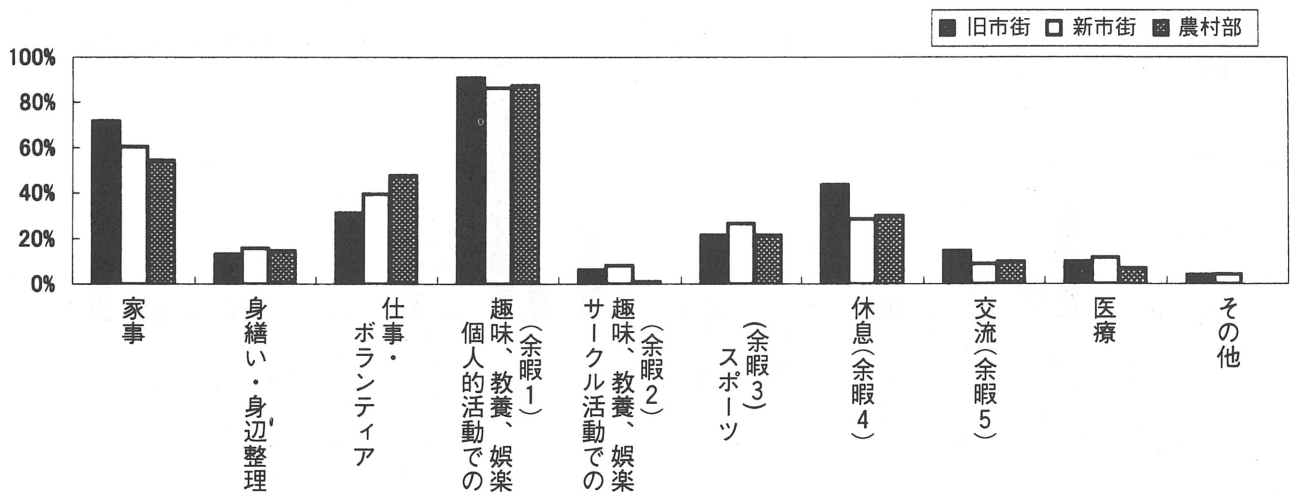


図2 行為類型別活動状況

しては幾つかの行為にその活動が集中している。また、この個人的活動には20行為挙げられているが、パチンコ以外は全て自宅や自宅の庭等での活動となっている。本行為類型の活動状況を地区別にみると若干「旧市街」で活動が多くなっている。

ちなみに、自宅外で他の人や仲間との交流を伴う「講座・クラブ・サークル活動での趣味・教養・娯楽(余暇2)」は10行為挙げられるが、いずれも数パーセント以下の非常に低い活動状況にある。また、この「講座・クラブ・サークル」に参加し活動する高齢者は「農村部」にはほとんどおらず、多くは「新市街」「旧市街」居住の高齢者となっている。

### (3)「仕事・ボランティア」の行為別活動状況(図4)

この中では、“農作業”“店の仕事”“会社の仕事”“犬の散歩・世話”が多いものである。

地区別にみると、「農村部」では当然のことともいえるが、地場産業の“結城紬”を含め“農作業”が突出して多く、仕事に関しては生涯現役といった高齢者が比較的多くみうけられる。「旧市街」では自家の“店の仕事”が、「新市街」では勤め人としての“会社の仕事”や、数は少ないが“家庭教師”や“ボランティア”といった活動がみられることが特徴的である。

また、活動場所をみると、「農村部」は農作業に伴う畑等で、「新市街」は自宅外での仕事やボランティアで、両地区とも自宅外での活動が主となっている。それに対し、「旧市街」では自宅内

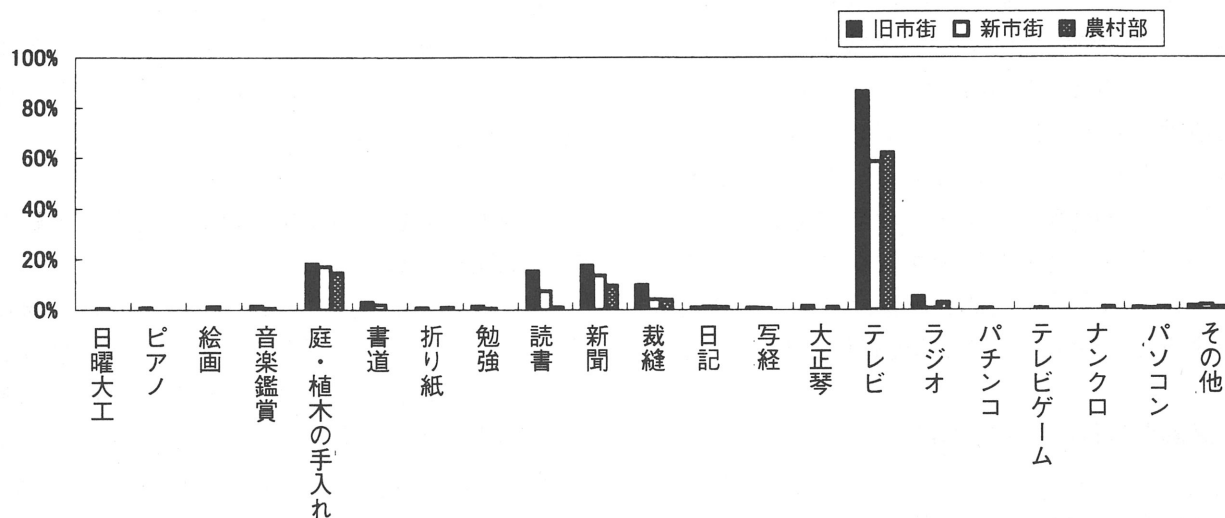


図3 「個人的活動での趣味・教養・娯楽(余暇1)」の行為別活動状況

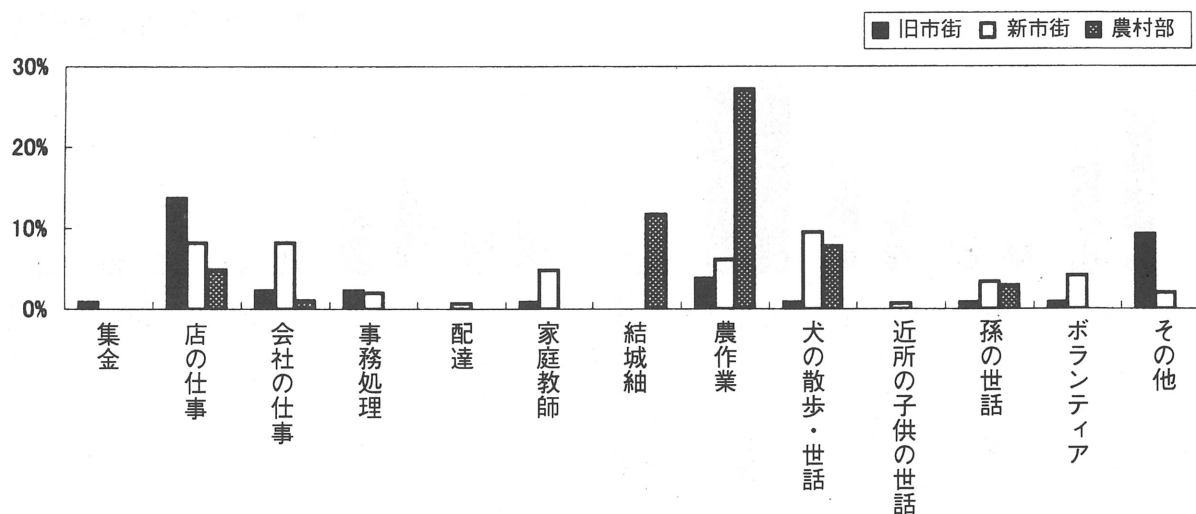


図4 「仕事・ボランティア」の行為別活動状況

での仕事等が中心となっているという特徴がある。

#### (4)「休息（余暇4）」の行為別活動状況（図5）

本行為類型における各行為は全て自宅での活動である。この自宅での「休息」行為の中では、“ゆっくりする”が最も多く2割程度あり、次いで“昼寝”“お茶”が続く。地区別にみると、いずれの「休息」行為も「旧市街」が最も多く、特に“昼寝”“お茶”で顕著である。上記(3)の「仕事・ボランティア」での状況と同様、ここでも「旧市街」は自宅での活動が多いという特徴がある。

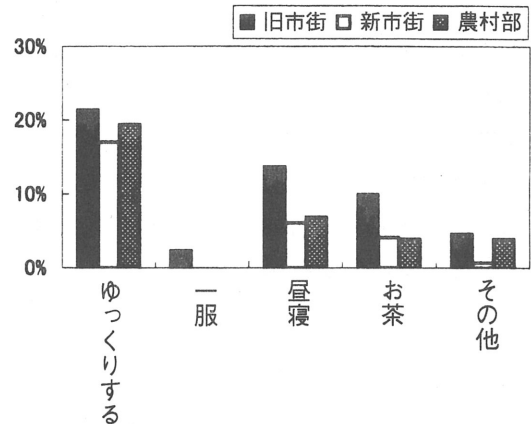


図5 「休息(余暇4)」の行為別活動状況

#### (5)「スポーツ（余暇3）」の行為別活動状況(図6)

「スポーツ」活動では、自宅外に出かけて行うものも多い。その中では“散歩”が突出して多く、高齢者の2割弱が行っている。次いで“体操”が続く、高齢者の0.5割が行っている。また、この“体操”は自宅内で行う高齢者が多い。これら以外の行為を行う活動者は非常に少ない。このように高齢者の多くは本格的スポーツ指向がなく、「健康」面を考え簡単にできる活動、特に“散歩”に集中するという特徴がみられる。

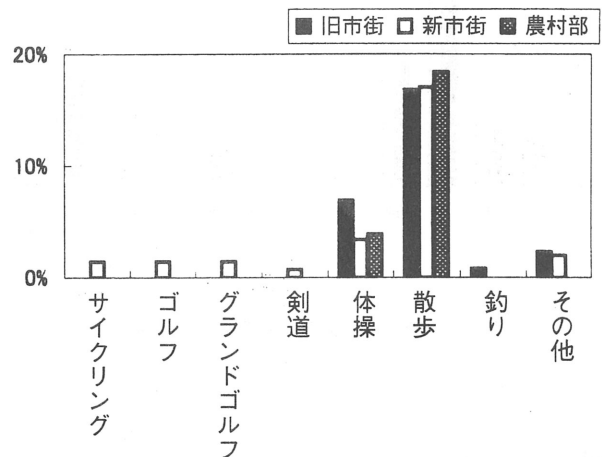


図6 「スポーツ(余暇3)」の行為別活動状況

### 4. 介護に対する高齢者の意識について

介護に対する高齢者の意識の分析に先立ち、被験者の病気や緊急時に介護を受けた経験の有無について概観しておく。表5に示す通り、全体で4人に1人が介護を受けた経験をもっている。これは高齢者にしてはやや少な目であるが、前述した日常生活動作（表4）からも分かるように、今回の回答者は全体的に健康な高齢者が多いということも影響していると考えられる。

#### (1)介護者の希望と現実について（図7）

病気や緊急時に介護を頼みたい希望介護者と、介護を頼むことにならざるを得ない現実的介護者の比較をみたものが図7である。これを見て分かるように、全般にわたり希望と現実との差はほとんどみられない。そして高齢者の多くが子供である「息子」「娘」に期待をしている。次いで夫婦間での介護が続く。なお、公的サービスである「民生員」や「H・H（ホームヘルパー）」を挙げる高

表5 病気等における被介護経験の有無

| 単位：人    |              |               |            |                |
|---------|--------------|---------------|------------|----------------|
|         | 有            | 無             | 不明         | 合計             |
| 一人暮らし世帯 | 26<br>(35.1) | 46<br>(62.2)  | 2<br>(2.7) | 74<br>(100.0)  |
| 夫婦のみ世帯  | 34<br>(24.6) | 103<br>(74.6) | 1<br>(0.7) | 138<br>(100.0) |
| 家族同居世帯  | 32<br>(20.3) | 123<br>(77.8) | 3<br>(1.9) | 158<br>(100.0) |
| 合計      | 93<br>(24.4) | 282<br>(74.0) | 6<br>(1.6) | 381<br>(100.0) |

( ) 内は%

齢者はほとんどいない。意外なことは、現実的介護者としても「嫁」を挙げる人がほとんどいなかったことである。

#### (2)男女別希望と現実的介護者について(図8,9)

男女別に希望介護者と現実的介護者をみると、

上記(1)で述べたと同様の傾向にあり、希望と現実との差はほとんどみられない。夫婦間でみると、子供に期待していることには変わりはないが、男は妻に期待するのに対し、女性は夫よりも子供に強い期待を抱いていることが分かる。また、女性は夫に比し「親戚」や「嫁」あるいは「H・H」に期待する人が多いのが特徴である。

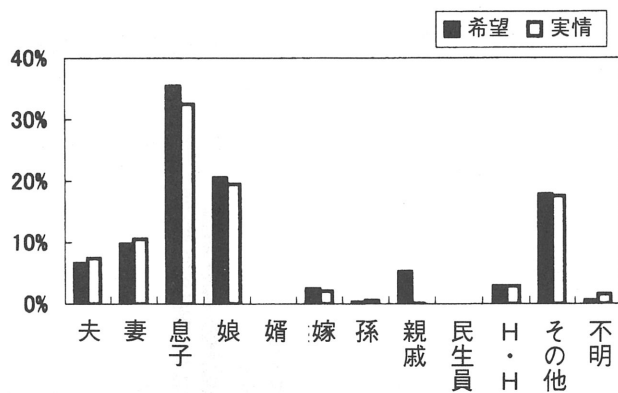


図7 希望介護者と現実的介護者

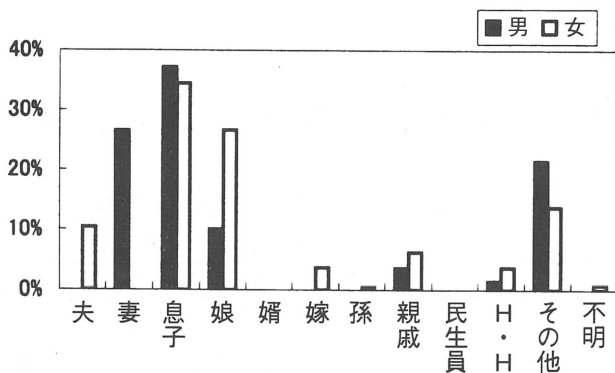


図8 男女別希望介護者

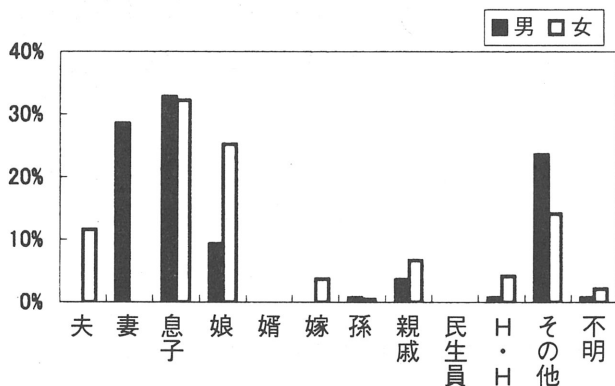


図9 男女別現実的介護者

### (3)世帯類型別希望と実況的介護者について

世帯類型別に希望介護者(図10)と現実的介護者(図11)をみると、各世帯類型毎の希望と現実との差はほとんどみられない。一人暮らし世帯では当然のことながら夫(妻)がいないこともあり、子供である「息子」「娘」への期待が大きい。特に現実的介護者となると「息子」よりも「娘」への期待が圧倒的に多くなる。また、一人暮らし世帯の場合は子供の他に「親戚」や「H・H」への期待が他の世帯より高いのが特徴である。夫婦のみ世帯では夫婦間の介護と子供への期待が半々程度となっている。他は若干であるが「親戚」や「H・H」もみられる。なお、現実的介護者となると子供よりも夫婦間での介護を考える人が多くなる。家族同居世帯の場合は同居家族である子供への期待が圧倒的に多い。現実的介護者では希望介護者とはほぼ同じであるが、若干「娘」への期待が下がる。この「息子」と「娘」については、同居している子供がいない場合は「娘」が、同居している子供がいる場合はその子供(多くの場合は「息子」)が現実的介護者となることを示している。

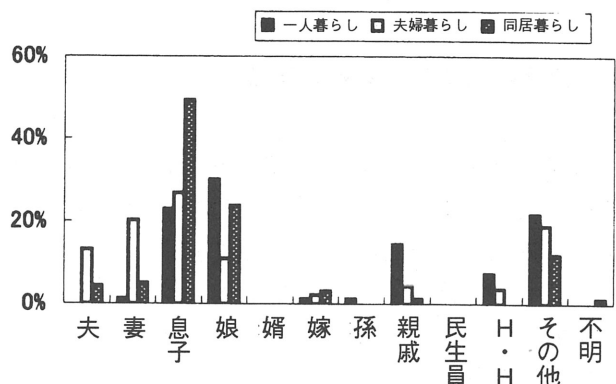


図10 世帯類型別希望介護者

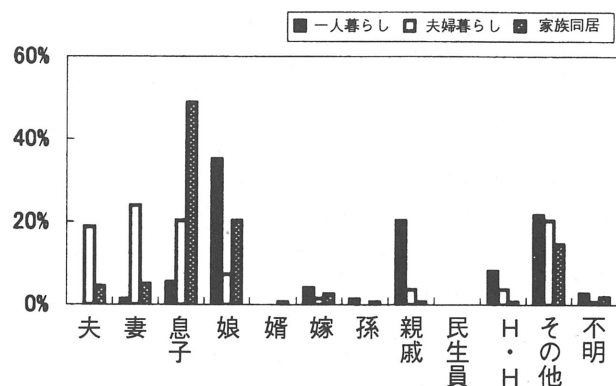


図11 世帯類型別現実的介護者

## 5. 居所に対する高齢者の意識について

## (1) 居所の希望と現実について (図 12)

将来、体が不自由になったり、動かなくなったりした時の希望と現実的居所をみたものが図 12 である。まず、将来の希望居所についてみると、やはり「自宅」での生活を希望する高齢者が約半数を占め、突出して多い。次いで「特別養護老人ホーム」、「病院」、「子供の所」と続く。一方、将来の現実的な居所についても、「自宅」が最も多く、以下「特別養護老人ホーム」「病院」「子供の所」と続き、希望居所の場合と同様の傾向にある。しかし、希望の場合に比し、「自宅」の比率は3割弱にまで落ち込む一方、「特別養護老人ホーム」と「病院」が希望の場合に比し大きく増加している。このように、希望としては「自宅」でその生涯を全うしたいと望んでいるが、現実的には「特別養護老人ホーム」や「病院」に入るしかないと考えている高齢者も多く、希望と現実の間にはギャップがあることが分かる。また、希望居所では4人に一人が、現実的居所では3人に一人が「未だどうするか考えていない」と答えており、高齢者の心が不安とともに揺れていることを示している。なお、「ケアハウス」は希望でも現実でもほとんど指摘されておらず、施設整備の遅延とともに認知度が極端に低いためなのか今後の検討課題の一つといえる。

## (2) 世帯類型別希望と現実的居所について

将来の希望居所(図 13)と現実的居所(図 14)を世帯類型別にみると、家族同居世帯と夫婦のみ世帯においては両者とも「自宅」がトップであることには変わりはないが、一人暮らし世帯では希望では「自宅」がトップであるが、現実になると「特別養護老人ホーム」に取って代わられる。また、「自宅」は希望と現実では比率に差はあるが、いずれにおいても、家族同居世帯、夫婦のみ世帯、一人暮らし世帯となるに従い急激に減少している。現段階で、どの程度高齢者が公的介護保険制度について理解しているかは定かではないが、夫婦のみ世帯や、特に一人暮らし世帯では、やはり自宅での生活の継続に対して不安を感じている様子が窺える。いずれにせよ施設ケアとしての「特別養護老人ホーム」や「病院」への期待や要望も

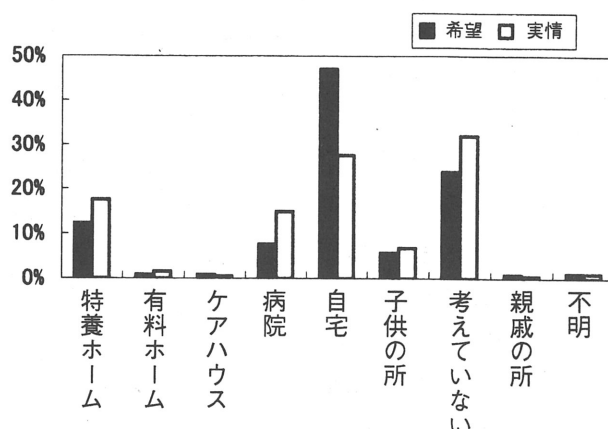


図 12 希望居所と現実的居所

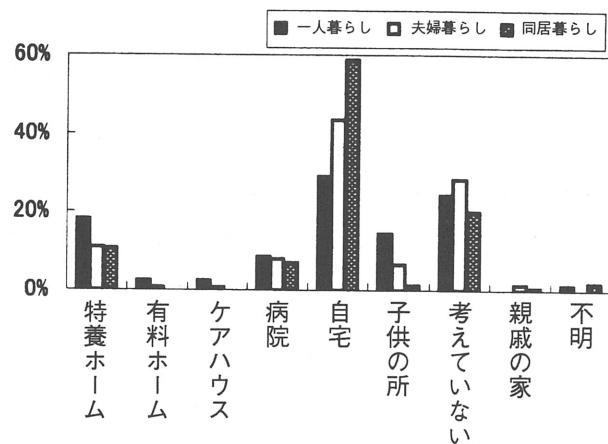


図 13 世帯類型別希望居所

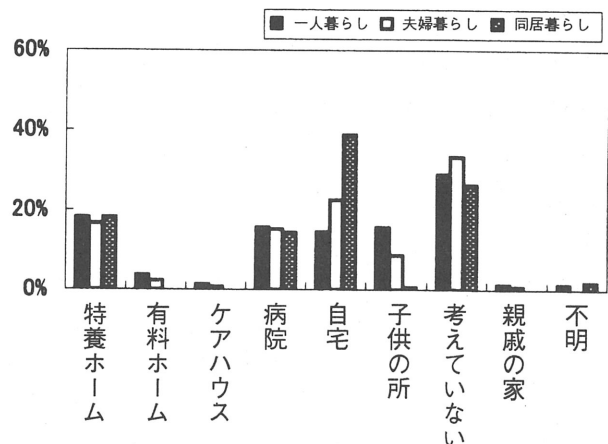


図 14 世帯類型別現実的居所

少なからずあるのが実態といえる。

## (3) 住居形態別希望と現実的居所について

住居形態別の分析に先立ち、回答者の居住形態を概観しておく。回答者のほとんどは戸建持屋層

で、全体の9割（農村部では100%）を占めている。その他、分譲マンションが数%あるが、残り1割弱が賃貸層で借家、アパートを中心とした住居形態となっている。

住居形態別（図15、16）にみると「持屋層」と「賃貸層」とで将来の居所に対する意識が大きく異なることが分かる。「持屋層」でみると、希望では2人に一人までが「自宅」での生活を願っている。ただし、現実となると4人に一人に激減している。このように、たとえ持屋層でもその意識は、自宅に住み続けることを願っているが、現実にはそれが叶わないと考えている人が多い。また、「賃貸層」ではやはり「自宅」は少なく、希望でも「特別養護老人ホーム」と同率の6人に一人程度しかいない。そして、現実となると更に減少し半分以下になってしまう。また注目すべき点は、将来の居所について「考えていない」という高齢者が、特に賃貸層で非常に多いということであり、“なるようにしかならない”といった諦観的な意識が垣間見られる。

## 6. まとめ

以上をまとめると、次のような点を指摘、提示できる。

### (1) 高齢者の日常生活について

- ① 高齢者は余暇活動を中心に生活している。
- ② 余暇活動の中ではテレビが圧倒的に多い。なお、余暇行為には多種多様なものが挙げられているが、テレビ以外の活動は非常に低調である。
- ③ 高齢者の活動は自宅で、かつ一人で行うものが多い。
- ④ 外に出ていく活動で主なものは、買い物、散歩、そして農村部では農作業が加わる。
- ⑤ 地区別にみれば、市中心部ではテレビが生活の中心で、農村部ではテレビと農作業等の仕事が生活の中心である。
- ⑥ 買い物以外で地域施設を利用する活動は多くはない。

以上のように、農村部の高齢者は仕事があるが、市中心部の高齢者の多くは暇をもてあまし、テレビに頼った生活になっている現状が垣間見られる。もっと外に出て、他との交流を促し、生きがいや生活の張り、楽しみといったものを与えられ

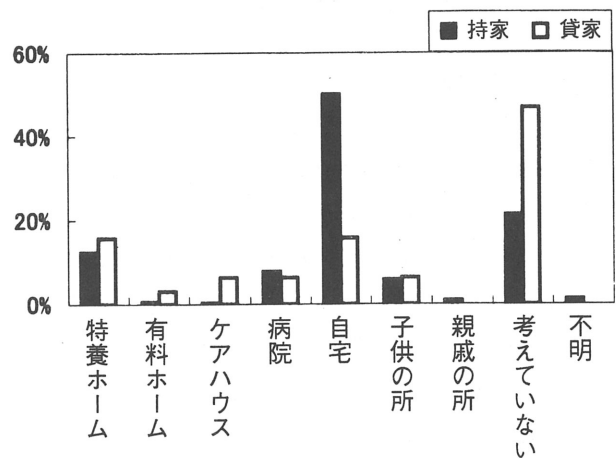


図15 住居形態別希望居所

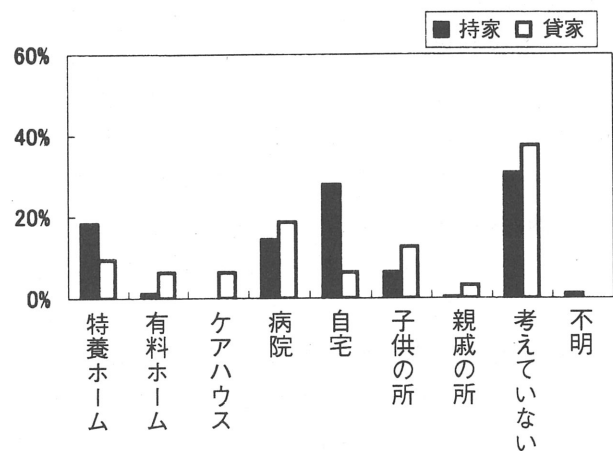


図16 住居形態別現実的居所

るような対応が必要である。

### (2) 高齢者の意識について

介護に対する意識については、高齢者の多くが介護にあたっては子供に期待をしているのが実態である。また、H・H（ホームヘルパー）に期待する人は一人暮らしの一部を除けばほとんどいないのが現状である。公的介護保険制度が始まってまだ半年足らずといった時期に本調査を行ったことも影響しているとも考えられるが、まだまだ公的介護に期待を寄せる高齢者は少ない。

また、居所については上記の介護の問題とも深く関連する問題である。高齢者の約半数は自宅でその生涯を全うしたいと考えているが、現実的には介護を含む何らかの問題でその希望が叶えられない状況にあるのが実態である。まさに介護保険制度はこのギャップをなくすために登場したものであるが、現状ではまだ始まったばかりの制度で

高齢者にとって馴染みが薄く、特に元気な高齢者にとっては現実のものとしては捉えられない状況にあるものと思われる。今後はもっと介護保険制度を周知徹底することと、まだ現行の制度には問題点も多く、将来に安心をもてるような制度に改善していくことが必要である。

謝辞 本研究を遂行するにあたって、快く資料を御提供頂いた小山市役所情報管理課、調査に御協力頂いた高齢者の方々、また調査及び集計の段階で協力を頂いた羽山竜士君をはじめとする昨年度の瀧澤研究室卒研究生諸君に対し、ここに感謝の意を表します。

#### 補注

注1) 調査にあたっては、起床から就寝にいたるまでを時系列を追って聞き込み調査した。また、生活行為に関わる調査内容は、行為内容、時間、場所、連れの有無、交通手段等である。

注2) 本研究での分析対象生活行為は、調査より抽出した1日における高齢者の生活行為のうち、起床、就寝、朝・昼・夕食、入浴、排泄等の生活必需行為を除いたものである。また、ヒアリング調査において、明らかに日常生活とは異なると判断できる活動の場合（例えば、旅行に行った等）、それに伴う行為も除いている。

注3) 孫や犬の世話といったような、家庭内で割り当てられた役割も含む。

#### 参考文献

- 1) NHK 放送文化研究所編：国民生活時間調査，NHK（1995）.
- 2) 金子 勇：年高齢社会と地域福祉，ミネルヴァ書房（1996）.
- 3) 高齢社会とまちづくり研究会編：都市と高齢者，大成出版社（1994）.
- 4) 荒井良雄，岡本耕平，神谷浩夫，川口太郎：都市の空間と時間，古今書院（1996）.
- 5) 太田貞司：在宅ケアの条件，自治体研究社（1992）.

小山工業高等専門学校 建築学科

(E-mail address) takizawa@oyama-ct.ac.jp

「受理年月日 2001年9月28日」

